鮮やかな夕映えを背に、厳かな山戸能が披露された
＝鶴岡市の道の駅あつみ・しゃりん

夕映えの海と伝統の舞

鶴岡 山戸能上演

鮮やかな夕映えを背にして県指定無形民俗文化財・山戸能を楽しむ「夕陽（ゆうひ）能」が21日、鶴岡市早田の道の駅あつみ・しゃりんで開催された。

山戸能は、同市温海地域の山五十川地区で室町時代から受け継がれている。この日は山五十川古典芸能保存会の約30人が出演し、舞台を清める「座揃囃子（ざぞろいばやし）」で開演。雲一つない空が夕日で染まる中、稚児舞「恋慕の舞」と、討ち死にした木曽義仲を弔おうと木曽の僧が旅立つ話の能「兼平」を上演した。

徐々に日が傾くと、照らされた演者のシルエットだけが見える神秘的な雰囲気に。詰め掛けた100人以上のファンは、ゆっくりと沈む夕日と厳かな能をじっくりと鑑賞していた。

地域の伝統文化を広めようと毎年企画され25回目。今回は道の駅あつみのオープン25周年記念とした。

伝統の「松山能」奉納

皇大神社

酒田

酒田市松山地域の皇大神社で20日夜、県指定無形民俗文化財「松山能」が奉納され、狂言「瓜盗人（うりぬすびと）」と能「清経」が披露された。

「瓜盗人」は、畑の持ち主をかかしと勘違いした瓜泥棒が、畑の持ち主の目の前で芝居の稽古をするという笑い話。一方、「清経」は都落ちして船から身を投げた平清経と、その妻との悲話。観客は笑ったり涙したりし、対称的な演目を楽しんだ。地元の小学生らによる子ども狂言も上演されたほか、能鑑賞と合わせて松山地区の歴史に触れる城下町歩きが行われた。

松山能は約350年の歴史があり、地元住民で組織する伝承団体「松諷（しょうふう）社」（榎本和介会長）が継承している。年3回の定期公演があり、皇大神社での奉納は「月の能」と呼ばれている。

狂言「瓜盗人」の一場面＝酒田市・皇大神社